

## 発刊にあたり(2)

前回 2006 年のハンドブック改訂から、この 10 年で試験の評価方法は大きく進化しました。実車試験による性能評価から、各コンポーネント・部品へのカスケード化、および CAE の活用により、実車性能を予測評価する流れがより加速し、多くの領域で広い意味でのバーチャルテストが可能となってきました。

また、各コンポーネント間の連携が高度化、複雑化する中で、全体最適の視点で効率的に最適解を見い出したり、機能の最適統合を可能とするモデルベース開発の方向に進化しています。

これらの進化を支える計測技術も大きく進歩し、従来は捉えることが難しかった複雑な現象や、人体が感じる操作感などの定量化が一段と重要になってきています。

さらに、予防安全の領域においては、認知・判断・操作といった人間のドライビングプロセスを支援する技術や、万が一のための衝突回避技術の採用が増加し、それらの効果やメカニズムを解明する評価手法も開発されてきています。

編集にあたっては、以上のような進歩を可能な限り取り込むと共に、他編との部分的な重複があっても、車両の試験・評価に必要な項目は記述することとし、本編のみで車両の試験・評価が完結することを優先しました。

最後に、発刊にあたり、各章の構成から取りまとめ、クロスチェックまでご尽力いただいた委員の皆様、および執筆いただいた各分野の専門家の皆様に、改めて深く感謝の意を表します。

2016 年 10 月

試験・評価(車両)編 編集委員会

委員長 松本 浩幸